

フランス研修報告 パリ編

大庭ゼミ4年 宮下朋 山本初花 喜多川舞菜

①実地体験（観察・見学）

【3月10日（火）】

○ソルボンヌ大学 INSPE（教職大学院）

ソルボンヌ大学 INSPE の音楽の授業に参加させていただいた。先生の「身体は楽器」という言葉から、身体の動きや音、発声を組み合わせた活動は、皆が楽しめるもので、実際の保育・教育現場で活用できそうだと感じた。特に印象に残ったのは、一人一人が1秒程度の動作と発声による音楽を創作し、リレーのように一人ずつ発表しながらそれを模倣して大きな音楽を創る活動だ。フランス語と日本語という言語の壁があるにも関わらず、音楽だけで1つの音楽を即興で創り上げる活動は、大変楽しく盛り上がりを見せた。先生の授業の中では身体的動作が多く使われていて、歌唱のどの部分を工夫するのが言語を使わずとも読み取ることができ、視覚や触覚からも音楽に親しめて感銘を受けた。

ゲストティーチング（大庭三枝先生）における平和の紙芝居の読み語りや、平和の手遊び、折り鶴作成は、共に授業を受けた教員・教員志望の方々と行った(図1)。手遊びや折り鶴に進んで参加してくださり、言語を超えた交流ができた。



図1 集合写真

【3月11日（水）】

○保育学校（Ecole Saïda）

この保育学校では空間構成を重要視した指導が行われており、机やイス等を流動的に動かし、活動に応じた教室設計に工夫が見られた。一見机のように見える図2は、図3のように中におもちゃが入っており、子どものしたい遊びに応じて活用の方法が変わっていた。見学の中ではおもちゃが入っている空間に体を入れている子どもも見受けられ、子どもの自由な発想とそれを尊重するフランス教育の特色を実感した。教室や廊下の様々なところに子どもの豊かな発想を促すような空間構成がされていた。子どもに実際に体験させる活動が多く、絵本を基に子どもがイメージの空間を協力して作成する活動や屋外保育での自然との関わりが盛んに行われていた。

フランスには特別支援学級は僅かで、インクルージョンが進んでいる。子どもの障害が分かった時点で保護者と学校は入念に話し合いを行い、その子が十分に生活できるような支援を行う。実際に保育学校の中では、支援が必要な子どもには支援員がついており、子どもの自発的な活動が十分に保障されていた。学校内の共有スペースには、テントや簡易的なベッドやぬいぐるみが置かれた子どもが落ち着くことのできる空間があり、インクルージョンが進んでいると実感した。違いを尊重し、子どもの個性を十分に発揮するために適切な支援を検討するフランスのインクルージョン教育は、日本の特別支援教育と違い画期的なものだった。

フランスでは大規模な教育改革が行われており、3歳から義務教育がスタートする。この保育学校では学びの連続性を保障するためにも、保育学校と小学校を一緒の敷地に配置し連携を強めていた。また、教育をする上で、小学校の先生における就学前の発達理解が重要であることを教えていただいた。



図2 移動式おもちゃ箱



図3 移動式おもちゃ箱



図4 空間構成の活動の様



図5 立ち幅跳び



図6 エッフェル塔作品

○UNESCO

UNESCO は、第二次世界大戦後に設立され、教育、科学、文化、コミュニケーションの分野で世界の人々の協力によって、世界の平和と人類共通の福祉に貢献することを目的としている。乳幼児期の発達の連続性へ重きを置き、特に学びの基礎となる幼児教育を重要視している。全ての国の子どもが就学前教育を少なくとも1年は受けられるように標準化することを目指している。194か国が加盟しており、世界中の知の結集として様々な国や地域、団体との会議を行い、様々な立場からの意見を取りまとめ、より良い教育の実現を目指している。どのような政策を講じたことで課題が解決したかを報告し、その内容を共有することで、子どものより良い学びを保障できるようにしている。しかし、今日起きている社会情勢の急激な変化に伴い、UNESCO内でも人事異動など組織が揺れ動いているようだ。

平和の壁（図9）にはユネスコ憲章の前文「平和は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」が9か国語で刻まれている。今この瞬間にも戦争により多くの人々が犠牲になっていることを考えると、生まれや人種関係なく、手と手を取り合い平和の砦を築くために幼少期からの平和教育が必要であると感じた。UNESCOで紙芝居・折り鶴の実践はなかったが、この前文を読み、私たちが各学校で行った実践が、フランスの子ども達や学生の心に「平和の砦」を築く1つのきっかけになったら素晴らしいと思う。また、私達が教師になり、この経験を子ども達に伝えたり、外国の子ども達と交流する機会を作ったりすることで、子ども達の心に平和の砦を築くことが出来たらより素晴らしいのではないかなと思う。

幼児教育担当責任者の方にお会いし、私たちはそれぞれ「日本における平和教育」「屋外保育の可能性」「インターネットが教育に与える利点や活用における課題」について質問をし、様々な国の保育・教育を最前線に知るからこそその多角的な回答をいただいた。今まで日本の保育・教育のみを学んできた私たちにとって視野が広がる貴重な経験をさせていただいた。



図7 集合写真



図8 教育の変革



図9 平和の壁

【3月12日（木）】

○屋外乳児保育所 (la Halte-garderie de plein air de la FOCSS)

生後18か月~4歳までの子どもを野外で保育する乳児保育所を訪問した。保育所は木々に囲まれたトンネルのような道を抜けた先にあり、子ども達は自然の中で思い思いの活動を行っていた。保育所はトイレや職員のスペース以外は完全に野外になっており、大雪が降らない限り外での活動となる。子どもたちは雨が降っても外で活動できるように、スキーのような防寒防水対策のとれた服を着ていた。子ども達は常に外にいるため、免疫が強化され、強い身体が育成されるそうだ。この乳児保育所の砂は子ども達のしたい活動に合致した砂で、見学の中でも砂をご飯に見立てている様子や、お城を作る様子が見られた。この砂に絵を描くことで芸術を通じた成長発達が見込めたり、砂の固まる性質や重さなどから科学事象の基礎を学んだりできる。砂の衛生管理も徹底されており、毎朝の掃除から週1回のバクテリア検査、年1回業者による清掃が行われている。子ども達は自発的に独自の世界観を持ちながら遊び、子ども達同士でルールを作りながら遊んでいく。先生はダンスや歌の活動を行なうが、それを子どもに強制せずやりたい子が集まってやるというスタイルが画期的だった。

野外で子どもたちが遊ぶ様子を見ると、子ども達は自由に走り回り、自由に砂やおもちゃを使い生き生きして活動に取り組んでいて、様々な学びを得ている様子がうかがえた。日本の保育現場ではあまり見ることのできない、これまでの自分の価値観を覆す保育方法で、子ども達の学びは十分に保障されていると感じた。ただ徹底した衛生管理や環境、親の理解があってこそ成立する保育方法であると思った。

○Boursault 小学校

この小学校は東京の小学校との協定を結んでおり、5年生は修学旅行で日本に来たそうだ。1年生2年生の複合クラスと5年生と交流したが、日本語にチャレンジしていたり、日本語の歌を披露してくれたりと進んで異文化に関わっている様子が見ることができて良かった。交流では平和の紙芝居、手遊び、折り鶴を行ったが、特に折り鶴は楽しんで折る様子が見られて、やりがいを感じた。その後、隣接した保育学校のクラスでも平和の紙芝居を行ったが、子ども達が気になったことを進んで質問しており勉強になった。

フランスの新しいシステムでは大学3年生の最後に採用試験が行われ、合格したら1年間、実際に小学校に赴任し、半分の給料をもらいながら適正審査が行われる。1年間の審査の結果により正式に採用されるかが決まるシステムになっていることを学んだ。日本は1か月の実習で教員になれるので実践不足に陥りやすいが、フランスのシステムは実際に1年間子どもと関わることで経験が積めて、教員にふさわしいか十分な審査もできるので非常に良いシステムだと考えた。私たちも保育・教育実習で1か月を過ごし、子どもと関わることの楽しさや、

保育士・教員の仕事のやりがいや大変さを感じることができた。しかし1か月は短いと思うため、日本でも同期間の実習期間が設けられれば、より教員にふさわしい人を採用することができるので、自分にとっても小学校にとっても良い案だと考えた。

【3月13日（金）】

○Michel-Ange 小学校

見学をしたクラスは、1年生と4年生の複合学級で、児童一人一人が各々のペースで課題を進めていた。教室構成はグループの形になっており時折、グループ内で意見交換をしながら進めていた。1年生の課題に着目すると、絵本を途中まで読み、絵本の続きを文や絵で表現する活動を行っていた。児童は分からない言葉をすぐに辞典で調べたり、先生に聞いたりして意欲的だった。複合学級にすることで1年生は4年生に憧れて意欲が芽生え、4年生は1年生にお手本を見せようとして互いに良い影響を与えていた。複合学級は親からの心配の言葉も拳がっていたが、成績向上の結果が出ていて、挑戦的だがよい取り組みだと感じた。

この小学校には日本語クラスがあり、週3回授業があるそうだ。学校全体でも年に数回の海外週間を取り入れ、異文化理解に繋げていた。例えば日本週間では福笑いやしめ縄づくり、年賀状を書くなどの活動を行なったそうだ。海外週間は外国語を学ぶきっかけや、外国籍の友人への理解にも繋がるので、日本でも参考にしたい取り組みだと思えた。

【3月16日（月）】

○保育学校・特別支援学級訪問（Ecole Dunois）

訪れた保育学校には70人の児童がおり、異年齢でクラスが編成されていた。広い中庭には、友情のベンチ（図10）という一時避難できるベンチがあった。このベンチに座っている友達がいたら「大丈夫？」と声をかけるなど子どもの社会的行動のきっかけが生まれるようにといった願いが込められている（AGEEM 発案）。また子どもたちが描いた原画をもとにアーティストの方が描いたタイル壁画（図11）があった。子どもとアーティストが協同で作ったタイル壁画は、子どもの思いと子どもに対する思いがよく込められており、保育学校を明るく楽しめるきっかけとなる良い作品だと思った。この保育学校や小学校に行く途中にも様々なグラフィックアート（図12、13）が点在しており、子ども達が楽しんで学校に行き、自然と芸術を学べる環境設定になっていた。

平和の紙芝居の読み語り、平和の手遊び、折り鶴作成を子ども達と一緒にいった。特に折り鶴作成では、子ども達は見よう見まねで一生懸命に折っており、完成すると喜んで保育室にある他のおもちゃを使いながら折り鶴とごっこ遊びをしていた。2羽目も折りたい子どもも出てきて、新しいことに挑戦する意欲を実感した。

フランスの特別支援学級は、第三者委員会と社会医療専門家、心理士がより良い支援の提供のために連携を取っていることが特徴である。見学した特別支援学級の空間は、グループで活動する場所、1人で活動する場所、教師と児童と一緒に活動する場所、心を落ち着ける場所など、用途によって様々な空間に区切られていた。また、児童1人1人の特性に合わせた活動表や個別支援計画、段階に応じた教具（図14）などがあり、個人のペースがとても尊重されていると感じた。マジックテープにイラストの描かれた教具を用いることで1日の予定を児童が自ら立てながら、言葉のポキャブラリーを増やしたり、自分が何をやるかの説明の方法体験的に学ぶことができたりして参考にしたい教育方法だと感じた。



図 10 友情のベンチ



図 11 タイル壁画



図 12、13 グラフィックアート



図 14 個人対応の教具



図 15 教室設計

②文化体験

【3月14日（土）】

○ノートルダム大聖堂

入口から迫力があり、様々な彫刻、絵画、ステンドグラスの美しさや壮大さは息を呑むものであった。天井までも芸術的な彫刻で彩られておりその精巧な建築は圧巻だった。訪れた時間は 15 時過ぎだったが、差し込む光によってステンドグラスが反射した壁が美しく、絵画と重なるとまた違った見え方になり、綺麗だった。ネットの写真では見ることでできない見え方であり、現地に足を運ぶ重要性を感じた。



図 16 ノートルダム大聖堂

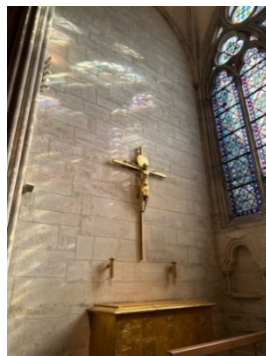
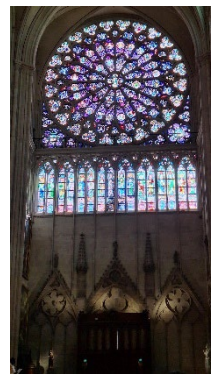


図 17、18 キリスト像とステンドグラス



【3月15日（日）】

○ルーブル美術館

『モナ・リザ』(図 19)や『ミロのヴィーナス』(図 20)『サモトラケのニケ』(図 21)『ハンムラビ法典』(図 22)など様々な芸術作品を鑑賞した。その時代による美術の特徴を感じることができ、時代がどのように移り変わっていくのかを作品を通して知ることができた。美術作品はとても大きく迫力があり、芸術家たちの息遣いを感じられるような技術を生で感じることができた。また、教科書で紹介される美術作品や写真でしか見たことがなかった美術作品を生で見ることができ、作品の大きさや迫力に驚いた。美術館の広さは館内を回っている時にも感

じたが、外観を眺めるとより一層広大さを感じ、圧倒された。美術館の内装も展示物によって精巧に作られており、美術作品を鑑賞しながらその雰囲気までも楽しむことができた。

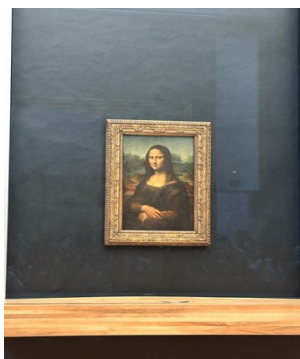


図19 モナ・リザ

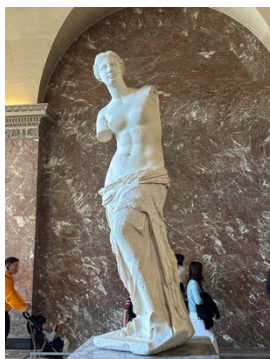


図 20 ミロのヴィーナス

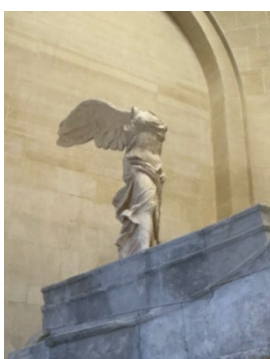


図 21 サモトラケのニケ



図 22 ハンムラビ法典



図 23 象形文字



図 24 コルサバードのラマッス

【研修場所】 教職大学院 1 校、小学校 2 校、乳児保育所 1 校、保育学校 2 校、UNESCO
【紙芝居・折り紙実践】 計 4 回